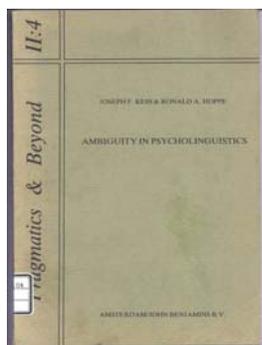


館蔵資料紹介No.18

Ambiguity in Psycholinguistics

後藤 正紘

「人間の認知能力や言語が用いられる状況・場面や対人関係という脈絡の中で人間の言語活動を解明することが期待される学際的な言語の研究」が、逐次、オランダのJohn Benjamins 社から Pragmatics & Beyond というタイトルの叢書の中の1つのモノグラフとして出版されてきている。



「人間の認知能力や言語が用いられる状況・場面や対人関係という脈絡の中で人間の言語活動を解明することが期待される学際的な言語の研究」が、逐次、オランダのJohn Benjamins 社から Pragmatics & Beyond というタイトルの叢書の中の1つのモノグラフとして出版されてきている。

「人間の認知能力や言語が用いられる状況・場面や対人関係という脈絡の中で人間の言語活動を解明することが期待される学際的な言語の研究」が、逐次、オランダのJohn Benjamins 社から Pragmatics & Beyond というタイトルの叢書の中

標題の書はカナダのヴィクトリア大学の言語学部のJoseph F. Kess とRonald A. Hoppeの両教授によって執筆され、1981年に本叢書の12番目のモノグラフとして出版されたものである。両教授は長年、「人間が文を処理するためのストラテジ」に関する研究に従事してきているが、標題の書は、主として、過去20年間に多くの言語学者や心理言語学者たちによって行われた被験者

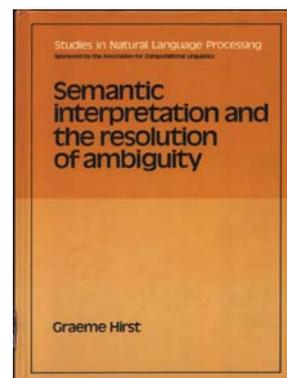
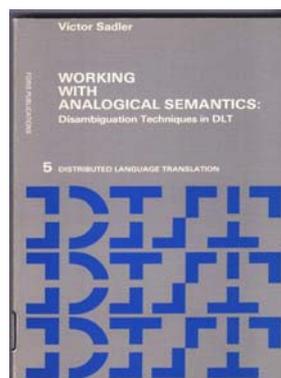
(subject)を用いた実験に基づく多くの個別的な「自然言語の処理における曖昧性(ambiguity)の心理言語学的なステータス」に関する研究成果を概観し統合したものである。それゆえ、標題の書において両氏は「曖昧文を適切に処理するためには言語の深層のレベルにも着目しなければならない」と主張したKatz, J. J. and Fordor, J. A. (1963)の論文“The structure of a semantic theory”. Language 39:170-210.;やChomsky, N. (1965)の著書 Aspects of the Theory of Syntax.

Cambridge, Mass.: MIT Press をはじめ、「曖昧性を解消する手段としての音声的な手がかりの重要性」を指摘した

Stageberg, N. C. (1971) の論文 "Structural ambiguity and the supra segmentals". English Record 21:4. 64-68. ; や Scholes, R. J. (1971) "On the spoken disambiguation of superficially ambiguous sentences". Language and Speech 14:1. 1-11. の論文、また、「曖昧性と文脈の関連性」について述べた Blakar, R. M. and Rommetveit, R. (1974) の論文 "Utterances in vacuo and in contexts". International Journal of Psycholinguistics 4:5-32. や Levelt, W. J. M. (1974) の著書 Formal Grammars in Linguistics and Psycholinguistics. 3 vols. The Hague: Mouton.

さらにまた、「言語の知識と世の中に関する知識の関連性という言語学の基本問題」について論じた Bever, T. G. (1970) "The cognitive basis for linguistic structures". In J. R. Hayes (ed.) 1970, Cognition and the Development of Language. New York: Wiley, 279-352. ; Caramazza, A., Briber, E., Garvey, C. and Yates, J. (1977) "Comprehension of anaphoric pronouns". Journal of Verbal Learning and Verbal Behaviour 16:601-609. ; Van Lancker, D. and Canter, G. J. (1978) Idiomatic Versus Literal Interpretations of Ditropically Ambiguous Sentences. Paper presented at the L. S. A. Winter Meeting, Los Angeles, 1979 など約 50 編の重要な先行研究を取り上げて概括している。そのうえ、両氏は従来の研究では不十分であった言語の曖昧性の認知に関する個人差の問題を視覚等を含めた人間の認知全般の問題として捉えて自説を展開している。

ところで、言語の曖昧性に関する問題の中で最も重要なものは曖昧性の特定とその解消の方法である。一般的には、言語に観察される曖昧性は語彙的曖昧性 (lexical ambiguity), 表面構造の曖昧性 (surface structure ambiguity) と深層構造の曖昧性 (deep structure ambiguity) の 3 種に分類される。そして、言語学においてはもちろんのことであるが、機械翻訳 (machine translation), 人工知能 (artificial intelligence) やコンピュータ言語学 (computational linguistics) などの分野においても曖昧性の特定と解消の問題は最重要事項の 1 つである。



たとえば、Papegaaïj, B. C. (1986): Word Expert Semantics: An Interlingual Knowledge-Based Approach. Dordrecht/Riverton: Foris. Distributed Language Translation 5. ; Hirst, G. (1987): Semantic Interpretation and the Resolution of Ambiguity. Cambridge: Cambridge University Press; Kurtzman, H. S. (1985) Studies in Syntactic Ambiguity Resolution. Doctoral Dissertation, Department of Psychology, MIT., August 1985. Indiana University Linguistics Club ; Ballmer, T. and M. Pinkal (ed.) (1983) Approaching Vagueness. North-Holland. ; Heny, F. (ed.) (1981) Ambiguities in Intensional Context. Dordrecht: Holland. D. Reidel Publishing Company; Atherton, C. (1993) The Stoics on Ambiguity. Cambridge: Cambridge University Press. などは哲学、認知科学や論理学の領域内で行われた曖昧性の特定と分析や解消法について考察した書物である。

曖昧性の特定とその解消法は言語学的意味論 (linguistic semantics) の中心的研究テーマであるばかりでなく、前述したように、心理言語学、言語哲学、機械翻訳、論理学、コンピュータ言語学や人工知能の研究においても主要な研究テーマなのである。曖昧性に関する言語学の学術論文は多数あるが、単行本は非常に少ない。そして、標題の書は曖昧性を取り扱った数少ない単行本の 1 つであり、曖昧性という学際的なテーマを研究する全ての人にとっての必読書なのである。

なお、本稿で言及した文献のすべてを本学の図書館は所蔵している。

(ごとう まさひろ: 教育学部教授)